

**J・L・マグネスとH・ソルドのシオニズムにみる『共生』
—“the Internal Jewish Question”と“the Arab Question”を巡って—**

大岩根 安里
同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

要旨

パレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人との共存の可能性を模索したバイナショナルリズム運動をユダヤ思想史の観点から考察する場合、マルティン・ブーバーやハンナ・アーレントの思想に着目する研究が主流である。その一方で、ユダ・L・マグネス (Judah L. Magnes, 1877-1948) やヘンリエッタ・ソルド (Henrietta Szold, 1860-1945) らによるアラブ人とユダヤ人の共生を目指すシオニズム理念は、これまで十分な考察がなされることはなかった。マグネスは、1942年にパレスチナでユダヤ人とアラブ人の共生を目指す団体、イフード (Ihud: “Union, Unity”) を創設し、ソルドも執行部の役員に名を連ねている。両者ともアハッド・ハアムの文化的シオニズムに影響を受けたアメリカ・シオニストという共通点を持つ。

本稿の目的は、ユダヤ・アイデンティティを保持しながら、パレスチナでアラブ人との共生を目指し、バイナショナルリズム運動を展開したマグネスと、彼の賛同者であるソルドのシオニズム理念を明らかにすることである。具体的には、両者が残した小論、書簡などから、“the Internal Jewish Question”と“the Arab Question”という用語を手がかりに、(それを用いているかどうかを含め) シオニズム理念の内容を浮き彫りにし、彼らが目指した共生への可能性と限界について考察する。

キーワード

ユダ・L・マグネス、ヘンリエッタ・ソルド、イフード、the Internal Jewish Question、バイナショナルリズム

**Zionism for “Co-existence” from the perspective of
Judah L. Magnes and Henrietta Szold:
Reflections on the “Internal Jewish Question” and
the “Arab Question”**

Anri OIWANE
Doctoral Student
Graduate School of Theology, Doshisha University

Abstract:

The mainstream exploration of the bi-nationalism movement, which searches for the possibility of the co-existence of Jews and Arabs in Palestine from the perspective of the history of Jewish Thought, is research focusing on the ideology of Martin Buber and Hannah Arendt. Meanwhile, the Zionist view held by Judah L. Magnes (1877-1948) and Henrietta Szold (1860-1945), which is a Zionist concept aiming for the co-existence among Arabs and Jews, has remained at the level of superficial statements and insufficient discussions. In 1942, Magnes established an organization called IHUD (“Union, Unity”), aiming for the co-existence of Jews and Arabs in Palestine, and Szold was one of the executive members of the organization. Both Magnes and Szold were American Zionists inspired by Ahad Ha’am’s cultural Zionism. However, the Zionist idea held by Szold and Magnes, who were practicing Zionists, has not been an object of focus in the history of Jewish Thought. One of the main reasons for this was most likely that Szold and Magnes did not systematically write down their concepts.

The present paper attempts to elucidate the characteristics of the Zionist ideas of Szold and Magnes, although the author is aware of the challenges to performing textual analysis due to the relative dearth of written materials. However, through examining the terms “the Internal Jewish Question” and “the Arab Question,” as employed in those speeches, essays, and short articles by Szold and Magnes that do exist, the author believes it is possible to evaluate both the potential and limitations inherent in the Zionist vision of Szold and Magnes.

Keywords:

Judah L. Magnes, Henrietta Szold, IHUD, the Internal Jewish Question, Bi-nationalism

1. はじめに

バイナショナリズムという概念は、語源的には、1) 二つのネーションが想定され、その二つのネーションによって構成される思想、2) 二つの民族的集団が一つの領土あるいは国 (a country) を治めること、資源を共有することを意味する。この1)と2)のはっきりしない観念は、時に不明瞭に融合し、一つの「バイナショナリズム」という概念が形成されてきた¹⁾。もともとは、パレスチナでユダヤ人とアラブ人が共に暮らすことを目指す思想、あるいはその理念に基づいて何らかの活動を行なう運動として知られている。バイナショナリズム運動ないし、その理念の担い手は元来ユダヤ人主導によるものであった。時代の変遷に伴い、バイナショナリズムを支持する担い手は流動的に変容し、同じ「バイナショナリズム」という呼称で特定の運動や概念を名付けたとしても、その用語が指すものは当然変化していることになる。Hermannによると、この状況を踏まえたうえで、今日、「バイナショナリズム」の用語は主に以下の4点に大別できるという。1) ユダヤ人主導のバイナショナリズム ('old school'として知られる)、2) ユダヤ人主導の新たな潮流 ('new school'として知られる)、3) パレスチナ人主導のバイナショナリズム、4) バイナショナリストの支持者。1)の'old school'とは、主に1920年代以降、英国委任統治下にあったパレスチナのユダヤ人共同体イシューヴを中心にして、隣人のアラブ人との共生、繁栄を目指した人々を指す。しかしながら、'old school'と呼ばれる人々の主張はユダヤ人のあいだでもマイノリティな存在に留まっていた。これに対し、2) 'new school'と名付けられたユダヤ人発の新たなバイナショナリズムの提唱は、主にイスラエル国家が建国されてから約20年余りを経た1970年代に起こった。数としては少数派ではあるが、大別すると二つの相反する潮流から声が浮上してきた。一つは、非シオニストあるいは反シオニスト左派と呼ばれる人々で、もう一つは、地理的ないし人口動態の観点から最終的に二国家解決案ではなく、一国家解決案としてのバイナショナリズムを支持する人々である²⁾。3)のパレスチナ人主導によるバイナショナリズム案もいくつかの潮流に細分化されているが、アブー・オデー (Abu Odeh) の主張を纏めるならば、バイナショナリズムを主張することでイスラエル国家の資源の共有化が可能となり、パレスチナ人の経済面および労働環境が向上するという見方がある。しかしながら、パレスチナ人の中でも未だバイナショナリズム案を唱える者は少数派に留まっている³⁾。4)はバイナショナリズムを巡る当事者ではないが、欧米の民主主義の観点から、バイナショナリズムを支持する人々を指す⁴⁾。

本論文で取り扱うバイナショナリズムとは、1)の'old school'を指す。とりわけ、その中心的な担い手であった、ユダ・L・マグネス (Judah L. Magnes, 1877-1948) と彼の親しい友人の一人、ヘンリエッタ・ソルド (Henrietta Szold, 1860-1945) に

焦点を当てる。マグネスとソルドは、イスラエル国家が建国される以前の、英国委任統治下のパレスチナで活動した二人のアメリカ・ユダヤ人として知られ、彼らは他のシオニストらから、「平和主義的シオニスト」(pacifist-Zionists)と呼ばれていた⁵。

ユダヤ思想史の観点からこれまでユダヤ人がバイナショナリズムという概念をどのように捉えていたのか、という点を考察する場合、マルティン・ブーバーやハンナ・アーレントの思想に着目する研究が主流であった⁶。その一方で、マグネスやソルドらのシオニズム観、つまりアラブ人とユダヤ人の共生を目指すことを前提としたシオニズム理念が何であったのかに関してはこれまでほとんど考察されてこなかったと言えるだろう。マグネスやソルドに関しては、ブリット・シャローム (Brith Shalom, “Covenant of Peace”) やイフード (Ihud: “Union, Unity”) といった団体の執行部に参加していたという事実のみの記述に留まっており、なぜ彼らがブリット・シャロームやイフードといった組織を通してユダヤ人とアラブ人との共生を目指したのかを解明する、彼らのシオニスト活動に伴った思想的背景に着目した研究はほとんど蓄積されておらず、今後の研究課題であると言える⁷。マグネスとソルドのシオニズム理念に対して、思想史の文脈で着目されることがなかった理由の大きな一因として、彼らが生前、自らの思想を体系的に論じた書物を記さなかったという点が考えられるだろう⁸。

本稿では、ソルドとマグネスが自らの思想を述べた書物を体系的に残さなかったために、テキスト分析をする上での十分な条件がそろっておらず、彼らのシオニズム観へ迫るアプローチが極めて脆弱であることを認識しながらも、両者のシオニズム理念の特徴を浮き彫りにすることを試みる⁹。つまり、ユダヤ・アイデンティティを保持しながら、パレスチナでアラブ人との共生を目指し、バイナショナリズム運動を展開したマグネスとソルドのシオニズム理念を明らかにすることである。具体的には、両者が残したスピーチ、エッセイ、小論などから、“the Internal Jewish Question”と“the Arab Question”という用語を手がかりに、シオニズム理念の内容を浮き彫りにし、彼らが目指した共生への可能性と限界に関して考察を試みる。

2. 二人のアメリカ・ユダヤ人：それぞれの生き立ちとシオニストとなった動機

シオニズム運動は、政治的シオニズム、労働シオニズム、文化的シオニズムなどに大別できる。政治的シオニズムは、シオニズム運動を外交によって推進しようとしたテオドール・ヘルツルのシオニズムを指す。また、政治的な解決を目指

し、パレスチナでの実践的な労働でもって事実上、シオニズムを実現しようと邁進したダヴィッド・ベン＝グリオンに代表されるシオニズムを労働シオニズムと呼ぶことが多い。文化的シオニズムは、アハッド・ハムにより提唱されたシオニズムで、ユダヤの文化的遺産を保持するために、パレスチナの地にユダヤの精神的センターを構築することを目指した思想である。マグネスとソルドは、アハッド・ハムの文化的シオニズムに影響を受けたアメリカ・シオニストであったという共通点を持つ¹⁰。彼らの具体的なシオニズム観を取りあげる前に、マグネスの生い立ちとシオニストになった背景を概観した後、ソルドがシオニストになった背景について簡単に触れたい。また、2-3 では、彼らが直接接点をもった契機に関して、2-4 では、二人が共に携わったとされるシオニズム活動に関して述べる。

2-1. マグネスの場合¹¹

ユダ・L・マグネスは、1877年7月、アメリカ合衆国西海岸のサンフランシスコで生を受けた。1922年45歳の時にパレスチナに移住し、ヘブライ大学の初代総長を務めたことで知られている。1948年10月にニューヨークで客死するまで、改革派の卓越したラビとして、パレスチナでのアラブ人とユダヤ人との共存を目指す活動を精力的に行なった。マグネスの父の家系はポーランド系の敬虔なハシディズムの流れを汲み、他方、母方はドイツ文化の影響を受けた流れをもっていた¹²。この二つの流れに加え、フロンティア精神に溢れていたカリフォルニアの環境の中でマグネスは幼少時代を過ごした。オハイオ州にあるシンシナティ大学とヒブル・ユニオン・カレッジに同時に入学する。1900年23歳の時、初のカリフォルニア出身の改革派ラビに任命され、3年間のドイツ留学を実現する。留学中の1902年12月に、ハイデルベルク大学から哲学博士の学位が授与された。この間、ベルリン・ユダヤ・カレッジで民族学生協会(National Association of Students)の結成に携わり、ドイツ・ユダヤ人社会で台頭しつつあった民族的なユダヤ主義に基づくシオニズム運動に触れることになる。その後、1903年にはシンシナティのヒブル・ユニオン・カレッジで司書兼聖書翻訳の教師を務め、1906年から4年間、ニューヨークのテンプル・エマニュエル・シナゴグにラビとして勤務した。1907年に初めてパレスチナを訪問、1922年、家族と共にパレスチナへ移住して以降、アラブ人との共生を目指し活動した。

マグネスの生涯の後半は、シオニストとしてヘブライ大学の設立に尽力し、パレスチナを中心に活動を行っていたが、彼の関心は、ユダヤ民族の文化的遺産の保持を目指すだけにとどまらなかった。元来、あらゆる民族を紋切り型に当てはめるコスモポリタニズムや少数派を多数派へと吸収させる引力を持つ、同化主

義に対しては否定的であった¹³。そのため、マグネスは改革派の流れを汲むラビでありながら、当時の改革派の教義がユダヤ系アメリカ人（Jewish American）の創出を目指していたことに対し批判的であった¹⁴。つまり、彼はユダヤ性が希薄化し、アメリカ社会へ同化吸収されていくことを懸念したのである¹⁵。

2-2. ソルドの場合¹⁶

ヘンリエッタ・ソルドは 1860 年 12 月、アメリカ合衆国東沿岸に位置するメリーランド州の最大都市ボルティモアに生まれた。ハンガリー系の両親の 8 人姉妹（うち 3 名は胎児の時に命を失うなどし、生き残ったのは 5 名）の長女として生まれた。父、ベンジャミン・ソルドは、柔軟性を欠いたドグマ信奉を嫌い、ユダヤの伝統と習慣の中にこそ、ユダヤの宗教的な原理が働くという考えを持つラビであった。ソルドは当時まだ女性が世俗的な科目ですら十分な教育を受けることができなかった環境において、ユダヤ教の学習の機会をも得た極めて特殊な人物であった¹⁷。1888 年、彼女は 28 歳の時にユダヤ出版協会（Jewish Publication Society of America, JPS）の編集委員に加わり、翌年の 1889 年の秋には、ロシア夜間学校において、アメリカへ新移民としてやってきた人々が早くアメリカ合衆国での生活に馴染むことができるように英語や洋裁などを教えるなど精力的に働いていた。1893～4 年頃¹⁸にはボルティモアのシオニスト協会の活動へと参加し始め、これがソルドにとって最初にシオニズム運動に触れた契機であった。このボルティモアのシオニスト協会では、もっぱらユダヤ文学やシオニストによる著作の講読会、ヘブライ語の学習が中心であった。1909 年にパレスチナへ初訪問して以降、現地の不衛生な環境を整えるべく、1912 年にニューヨークのテンプル・エマニュエル・シナゴグでハダッサーアメリカ・女性シオニスト機構（Hadassah, the Women's Zionist Organization of America）を設立した。1920 年、60 歳の時に「アメリカ・シオニスト医療団」（the American Zionist Medical Unit）の監督者としてパレスチナに渡ったのち、1945 年 3 月イスラエル国家の建国を待たずして、エルサレムで亡くなった。ソルドの最も大きな功績としては、最晩年に引き受けた「青年アリヤー」の事業であるが、ナチスにより迫害にさらされた少年少女、およそ 2 万 2 千人を被害から救うべく、パレスチナへ送る活動に従事したことがあげられる。いずれにしてもソルドがシオニスト活動家としてシオニズム運動に精を出したのは彼女の 84 年の生涯の半ばを過ぎてのことであった。パレスチナで生涯を終えることになるが、ソルドの希望としては、生まれ育ったアメリカの地に戻りたいと願っていた。

2-3. マグネスとソルドの出会い

さて、マグネスとソルドは生涯友好関係を築くことになるわけであるが、2人の最初の接点は、ソルドが後にハダッサを設立する（1912年）きっかけにもなった。ソルドは1902年以降、父の死に伴い、母親とニューヨークへ移住し、ユダヤ教神学校（Jewish Theological Seminary, JTS）に一時期在籍していた。1907年、マグネスの呼びかけにより、ソルドは「ハダッサ学習会」と呼ばれる小規模なグループの指導者の一人として、同学習会に参加するようになる。この学習会は、少女たちを対象にシオニストの著作を講読し、昨今生じているユダヤ問題に関して議論する場として想定されていた。マグネスは、ハダッサ学習会の指導的立場としてソルドが適任であると考えた。このハダッサ学習会という小さな組織は1912年に、ソルドが中心となり、学習会に留まらず、パレスチナでより実践的な活動を行なうべく、在米のユダヤ人女性によるシオニスト機構、「ハダッサ」として新たに組織化されることになった。

2-4. 「共生」を目指したシオニズム：イフードの設立

1925年に設立されたブリット・シャロームは、パレスチナの地でゲルショム・ショーレム（Gershom Scholem）やエルンスト・シモン（Ernst Simon）が中心となり、アラブ人とユダヤ人との共生を目指すべくユダヤ・アラブ紛争に関する研究を行うなどの目的で設立されたサークルであった。マグネスやソルドも当初は、ブリット・シャロームの理念に賛同していたが、やがて距離を置きはじめた。サークル内で、社会主義の流れをくむシオニズム理念に基づき、ユダヤ人入植地を増やしていくという政治化した傾向がしだいに強まってきたためである¹⁹。ユダヤ人入植地を拡大していくという考え方は、マグネスのみならずソルドにとっても受け入れられるものではなかった²⁰。最終的にブリット・シャロームは、内部に相反する政治的な要素が混在し、1933年で活動を停止した²¹。その後、マグネスは、マルティン・ブーバー（Martin Buber）やエルンスト・シモンら一部の元ブリット・シャロームのメンバーを加えて、1942年に新たにパレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人の共生を目指すべく、イフード（Ihud: “Union, Unity”）という団体を設立した。ソルドもイフードの執行部の役員に名を連ねていた。つまり、イフードはマグネスとソルドのシオニズム理念が結晶化したものであると言えるだろう。次節以降、マグネスとソルドのシオニズム理念を具体的にみていく。

3. 「ユダヤ人問題」の捉え方：内的問題か否か

3-1. 文化的シオニズム受容の仕方

マグネスとソルドは共にアラブ人とのパレスチナでの共存繁栄を目指すシオニ

ズム理解を有していたわけであるが、そもそも彼らのシオニズム理念にはどのような背景があるのだろうか。前章で概観したように、二人に共通している点は共に生涯の半ばまではアメリカで生活し、一定の成功をおさめており、ユダヤ人としての出自を誇りにしながらも、アメリカ文化・社会そのものを否定しているわけではない点があげられる。具体的には、マグネスは同化主義やコスモポリタンの思考を拒絶していた。このことは、逆にアメリカのユダヤ人共同体の連携を目指し、ユダヤ性を否定することなくアメリカ社会で地位を築いていこうという試みに通じる。マグネスは、ニューヨークにおけるドイツ系と東欧系に分断されていたユダヤ社会の連帯を呼びかけていたのである²²。ソルドの場合はロシア夜間学校を通して新移民がアメリカ社会に可能な限り順応するうえで必要な知識を提供する活動に励む一方、同時期に彼女は地元ボルティモアのシオニスト団体でのユダヤに関連する書物の講読会を通して、ユダヤ・アイデンティティを保持していた。二人ともユダヤ性を否定することなく、アメリカ社会での生活を営んでいたと言えるだろう。

さらに具体的な接点として以下のエピソードがあげられる。マグネスは、保守派の牙城として知られるユダヤ教神学校（JTS）に学長として招聘されたソロモン・シェヒター（Solomon Schechter）から、「ユダヤ主義」に関する影響を受けている。ソルドも、1902年にニューヨークへ居を移してから、一時期、シェヒターの特別な計らいにより、男子学生のみであったユダヤ教神学校に一人の女性として在籍しており、シェヒターの主張する「ユダヤ主義」に触れている。彼らがシェヒターから汲み取った「ユダヤ主義」とは何を指すのか。シェヒターは、ユダヤの伝統を近代に適合するように試みた。しかし、シェヒターにとっては改革派の取り組みは急速にユダヤ性を失い兼ねない行き過ぎの改革運動として映った。彼は、急進化しつつある改革派の歯止めとなるものとして、「シオニズム」を捉えていた²³。そのため、シェヒターによるシオニズム理解とは、アハッド・ハムがパレスチナにユダヤの精神的センターを築くことで、ディアスポラのユダヤ人社会の存続をも保持するという見解に基づくものであった²⁴。シェヒターもまた、ディアスポラを否定するのではなく、ディアスポラのユダヤ人社会の絆を強化するためにパレスチナを必要としたのである。マグネスはアハッド・ハムやシェヒターらによって共有された見解と極めて類似した言葉を残している。

「ユダヤ人やユダヤ教がパレスチナに精神的、知的中心をもたなければ、ユダヤ的生活は本質的な構成要素を常に欠くことになるだろう。また、そのような中心とは、民族郷土の性質を持たねばならない。最高権威を教会が握るカトリックとは異なり、ユダヤ教の最終的な権威は、日々、懸命に働く普通

の人々から成る民族の人生やその苦難、願望、積み重ねられた伝統や神に対する意識に由来するのである。そのため、ユダヤの中心地は、聖職者や学者のみで構成されるようなことがあってはならない。」²⁵

上述のマグネスの言葉は、1939年に出されたパンフレットに収録されているものである。彼の文化的シオニズムの受容度をはっきりと現れている箇所だといえるだろう。それ以前にソルドも、1896年の時点で、パレスチナの地の重要性を、「ユダヤ人の約束、古代の占領、族長、預言者、詩編の作者、血統の美德、追憶によって〔ユダヤの〕中心地として最も適した場所」²⁶であると述べている。

このようにマグネスとソルドの言葉から、ディアスポラのユダヤ人にとって、パレスチナの地がユダヤ・アイデンティティの保持のために重要な要素であるとみなされていたことがわかる。しかし両者にとって、パレスチナへの移住はアメリカでの生活を否定するものではなかった。むしろディアスポラ社会を否定しない文化的シオニズムを共有していたのだ。このことに加えて、彼らは、シェヒターの主張したアメリカ版文化的シオニズムを受容した。すなわち、ユダヤの伝統を近代的に変化させる必要があるが、ユダヤ性を失っていくことには懸念を示すという概念をも共有していた。例をあげると、ソルドとマグネスはそれぞれパレスチナに移住した1920年代初頭、パレスチナでのユダヤの伝統、慣習を遵守していたが、シナゴグという概念自体を排除していくようになった。1923年のローシュ・ハ・シャナーの聖日には、礼拝の「民主化、平等化」と称して、兄弟愛と社会正義に基づく理念を重んじながら、礼拝を行なった²⁷。マグネスとソルドらの試みは、ユダヤの伝統を現在の状況に適合するというシェヒターの発想の援用とも解釈できる。

3-2. 道義性の問題

マグネスとソルドのシオニズム理念における文化的シオニズムの受容に関しては、主に以下の二点が特徴的である。1) パレスチナという場所が、ユダヤの精神的センターであるとする文化的シオニズムを受容していたこと。2) アハッド・ハアムのユダヤ教理解に基づくものであること。アハッド・ハアムは1910年に“Judaism and the Gospel”という題目で、ユダヤ教について次のように述べている。

「私が他のことでも示してきたように、このことはおそらく最も重要なこととして考えられるが—ユダヤ教の傾向、〔それは〕道徳性（morality）に基づくものである。ユダヤの道徳性とは正義に基づくものであり、愛に基づく福音という〔名の〕道徳性なのである。」²⁸

ユダヤ教の実践は道義性に基づくものであると考えたアハッド・ハアムの見解は、マグネスやソルドらに継承されている。マグネスは、「道徳的 (moral) な主張²⁹は、未だなお、聞く耳を持つ者を見出すだろう。もし、あなたが世界の他の人々全員に失望し、もはや世界には何の道徳性 (morality) もないと感じるならば、〔その〕全てはあなた自身を失っていることに他ならない」³⁰と主張し、ユダヤ教の実践の大切さを説いた。ソルドは、ユダヤ／アラブ問題 (the Jewish-Arab question) という問題をはっきりと認識する必要がある、責任を持たないとすれば、それは許されない罪であると述べた。その理由として以下の二点をあげている。

「初めに、私をシオニズムへと駆り立てたのはユダヤ教 (Judaism) である。しかし、私は宗教としてのユダヤ教を信じているのではなく、私たちの道義心 (moral code) としてのユダヤ教を信じている。第二に、〔…〕ユダヤ／アラブ問題 (the Jewish-Arab question) は道徳性 (morally³¹) の問題であると同様に政治的な問題であると確信するようになった。〔…〕たとえ遅過ぎたとしても、イフードを通してこの問題の解決の道を探る努力が必要である。」³²

マグネスやソルドらが目指したシオニズムは道義性の問題と関係するものであったために、彼らがシオニズムを実践しようと試みた際、それは現実のパレスチナの状況を顧みると極めて困難な状況であったことがわかる。

3-3. 「ユダヤ人問題」の解決を最優先することに対して

1929年エルサレムの嘆きの壁で生じた小競り合いを境に、アラブ人による蜂起が勃発し、同年8月には、ヘブロンだけで60名のユダヤ人が殺され、その後生じた衝突で、最終的にユダヤ人113名、アラブ人116名が亡くなり、負傷者数はユダヤ人側が339名、アラブ人側が232名という大規模なものに発展した³³。マグネスやソルドはパレスチナに移住後、隣人としてアラブ人とつき合ってきた経緯があった分、この衝突に衝撃を覚えた。

パレスチナにおけるアラブ人の不満はおさまることはなく、1936年のおよそ3年間にわたる大蜂起は、パレスチナ全土へ広がった。1933年、ナチスが政権を掌握して以降、ヨーロッパのユダヤ人の状況は極めて厳しく、その状況からシオニストだけでなく、非シオニストのユダヤ人の中にも、迫害下にあるヨーロッパのユダヤ人の避難先として、パレスチナの地を求める声が高まった。あえて今日の視点から述べるならば、欧州における「ユダヤ人問題」の解決策を求めたことが、結果的にイスラエル国家の建設を後押ししたと解釈することもできるだろう。事実、アメリカ・ユダヤ人社会においては、アメリカでのシオニズム運動の草創期

以来、シオニストは少数派であった。けれども、難民化した欧州のユダヤ人の救出を最優先事項とし、1942年、ニューヨークで開催されたビルトモア会議において、ダヴィッド・ベン＝グリオンが提案したユダヤ・コモンウェルスの建設案に合意する形で、アメリカ・ユダヤ人社会は一つの見解を示した³⁴。さらに翌1943年には、アメリカ・ユダヤ人会議（American Jewish Conference）がアメリカにおけるユダヤ人団体の結束を強化するために設立された。同会議はシオニズムに関しては冷ややかな見方をしていたものの、欧州のユダヤ人救出策の手前、ユダヤ人国家建設を巡る議論に対して目をつむる態度を取った³⁵。このことは、ビルトモア会議以降、シオニストであるか否かにかかわらず、「ユダヤ人問題」の名の下に、アメリカ・ユダヤ人社会が結束するに至ったことを意味する。このような状況のなか、マグネスやソルドは、このビルトモア会議の採択に最後まで抗議を示した少数派であった³⁶。マグネスらが組織したイフードはビルトモア会議でのユダヤ・コモンウェルスの採択に対抗するものとして立ち上げられた。しかしイフードは、シオニズム運動全体の流れの中では政治的な効力は弱く、この点において、「共生」を目指すマグネスやソルドのシオニズムの限界点が顕著となった。

3-4. 「アラブ問題」という用語の不在

さて、“the Arab Question”という用語は、ブリット・シャロームの中では、パレスチナの地において、アラブ人住民の数の方がユダヤ人の数よりも優勢であることを問題として捉えたものであった。ブーバーによると、“the Arab Question”と習慣的に呼ばれた問題、別の言い方をすれば、パレスチナへのユダヤ人の入植の仕方こそが問題であるとして、イフードという連合はこの“the Arab Question”に立ち向かうために、機関誌『ベアヨット』を立ち上げたという³⁷。どの視点に立ち、何を問題にするかという点で、“the Arab Question”という語を肯定的に受け止め、用いるかは重要な問題となる。先にマグネスやソルドらは、その設立時には、ブリット・シャロームの目的に賛同の意を示していたが、後に見解の相違を見出したことを述べた。このことは、“the Arab Question”という用語を用い、パレスチナにおけるアラブ人住民の人口問題を問題として捉えようとしたブリット・シャロームに対して、マグネスやソルドは賛成することができなかつたと解釈できるだろう。ブリット・シャロームが用いた意味での“the Arab Question”という用語法、つまり、アラブ人の住民の数がユダヤ人のそれより多勢であることを問題として捉える認識は、マグネスとソルドの日記、書簡、エッセイなどには見当たらない。

マグネスやソルドが関心を抱き問題としたのは、“the Jewish-Arab question”、“the Jewish-Arab problem”や“the Jewish-Arab relations”であり、いかにパレスチナで二つの民族が共生するかということであった。

3-5. ユダヤ人内部の問題こそ問題であるとしたソルド

まだソルドがパレスチナへと移住する前の時代に遡ることになるが、彼女は1901年という極めて早い段階から、“the Internal Jewish Question”という問題を認識していた。“the Internal Jewish Question”という用語は、彼女が1901年に記した小論の表題である。彼女はこの論文のなかで次のように述べている。

「シオニズムは根本的な問いを提案できるだろうか。つまり、ユダヤ人問題の解決はユダヤ民族のナショナリティを回復することによってのみ、解決するのだろうか。[...] 外的な[要因からくる]ユダヤ人問題に加え、ユダヤ人問題とは内なる問題でもある。つまり、ユダヤ人問題は民族的なものに解体されると考えている人々の必要性から創出されたものである。」³⁸

ソルドの理解によると、ユダヤ人問題は二つの側面で問題とされる。1) 反ユダヤ主義などに見られる外的要素に基づく「ユダヤ人問題」、2) ユダヤ人共同体内部に孕む問題。つまり 2) に関しては、ユダヤ人自らがホスト社会へと同化する状況を顧みない主張である。しかし、ソルドはユダヤ人自らが自らのアイデンティティを民族的な繋がりとしてのみ理解することが果たしてユダヤ人が抱える問題（その多くはアイデンティティに起因する問題）の解決に至るのか疑問を投げかけている。さらに、ソルドが理解していたシオニズムは決してユダヤ人の民族的な解決のみを問題としたものではなかった。以下、続けて引用する。

「[...] 仮にシオニズムがユダヤ人問題の外的な要因—反ユダヤ主義的、経済的要素の解決をもたらしたとしても、ユダヤ人のユダヤ的生活の再構築を提案できるかという不安を覚えるだろう。[...] もしシオニズムが精神的なもの[つまり、精神的な充足を促すもの]であるならば、その精神的なものが真実となり、現実の実践を伴うものとなるだろう。」³⁹

ソルドの小論における文章はシナゴグや教会で説教を聴いているようなロジックで語られる場合が多く、その真意を掴むことは難しい。だが字義的に捉えるならば、ソルドはシオニズムの実践のなかに物質的、環境的な問題の解決ではなく、精神的な問題の解決をも期待していたことが窺えるのではないだろうか。

4. おわりに

ここで、本稿 3-2 で取りあげたシオニズムの持つ、道義性の問題に立ち返る。

マグネスとソルドは、すでに述べたように、1942年のビルトモア会議で欧州の「ユダヤ人問題」解決のために、ユダヤ・コモンウェルスの建設を承認した決議に抗議した。その理由は、マグネスとソルドが文化的シオニズムの流れを汲んだシオニズム理念を有していたためである。彼らはアハッド・ハムから、精神的な支柱としてパレスチナの場所を必要とする点、およびユダヤ教を道徳的な実践の行ないとみなす点を受容し、シオニズム活動を展開した⁴⁰。両者とも、理念的にはパレスチナをユダヤの精神的なセンターとして必要不可欠な存在であると主張すると同時に、実践的な活動としてはパレスチナの地でユダヤ人とアラブ人の共生を、その生涯の最後まで目指した。この矛盾とも捉えられかねない思想を、彼らはシオニズムの理念として育んだ。それは、彼らが目指した「バイナショナリズム」の語源自体が、1) 二つのネーションが想定されたうえで、それらのネーションの思想を指す、2) 二つの異なる民族が同じ土地での共生を目指す、といった両義的なものであることから明らかである。

異なるもの同士の「共生」を目指そうとする場合、それは一体どのような水準での共生なのだろうか。イフードの綱領（1943年）をひもとくと、3-a)には、「二民族の政治的平等を基礎としたある統治形態をパレスチナに築くこと」と記載されている⁴¹。しかし、イフードの活動は、アメリカ・ユダヤ人社会において、またパレスチナで主流派であったベン＝グリオン主導の労働シオニズムを前にして、政治的な影響力は乏しかった。イフードの活動における政治的影響力の弱さに見られるように、マグネスとソルドの描いた「共生」という理念は、当時の他のシオニストからすると、理想主義的な「平和主義的シオニスト」として留まっていたに過ぎないという評価を下すこともできるだろう。しかし、本稿 3-2 でシオニズムと道義心との関係に触れたように、晩年のマグネスとソルドは決して、彼らが描いたシオニズム理念を楽観的且つ肯定的に捉えていたわけではなく、自分たちが信じていたシオニズムが果たして正しかったのかという疑念を抱いていたことを付け加えたい。また、マグネスとソルドのバイナショナリズムの限界点は、彼らがアメリカ社会に受け入れられたユダヤ人であり、迫害にさらされるという経験を持たなかったことであり、その点が彼らのシオニズム理念の理想的な傾向を強めていたとも考えられる。少なくとも、彼らはパレスチナ在住の「アメリカ・ユダヤ人」として、バイナショナリズムを目指していたことに留意する必要がある⁴²。

本稿では、主にマグネスとソルドを取りあげたが、様々な潮流があったシオニズム運動のなかでも、「文化的シオニズム」という括りでシオニズムを考える場合、その受容の多様性（マルティン・ブーパー、ハンナ・アーレント、エルンスト・シモン、ハンス・コーンなど）への考察は大きな課題として残っている。それと

同時に、マグネスやソルドの描いた「共生」とは、一方向的なものであったと解釈することも可能である。当時のパレスチナ在住のユダヤ人とアラブ人の「共生」について、イフードの視点から取りあげた場合、アラブ人とユダヤ人という大きな相違にのみ関心が集中し、個々のエスニック的な背景（宗教的慣習の相違を含む）への眼差しは、後退してしまう。これらに関しては今後の課題としたい。

* 訳文中および引用箇所の執筆者による補足は、亀甲括弧〔 〕で示した。

* 本稿は JSPS 科研費の助成による研究成果の一部である。

註

¹ Tamar Hermann “The Bi-National Idea in Israel/ Palestine: past and present,” in *Nations and Nationalism*, 11 (3), 2005, pp. 382-383.

² Hermann, pp. 386-387.

³ Hermann, pp. 390-393.

⁴ Hermann, p. 397.

⁵ 「平和主義シオニスト」とは、1920年代から30年代にかけて、イシューヴの生活水準の向上を目指す者を指し、イシューヴ内での政治的な覇権には関心を持たなかったシオニストを指す。Rafael Medoff, *Zionism and the Arabs: an American Jewish Dilemma, 1898-1948* (Praeger, 1997), p. 35. この場合の「平和主義的シオニスト」とは必ずしも肯定的に評価された呼称ではない。むしろ、マグネスやソルドらは、「平和主義的」という冠を被せられることで、理想主義的な理念を掲げるのみで、現実の状況に必ずしもそぐわない主張を唱える者たち、という皮肉の意味合いを込めて呼ばれていた。

⁶ 主にブーバーに関連するものは例えば以下の研究書があげられる。Shalom Ratzabi, *Between Zionism and Judaism: The Radical Circle in Brith Shalom, 1925-1933* (Brill, 2002); Martin Buber: *Ein Land und zwei Völker. Zur jüdisch-arabischen Frage*, herausgegeben und eingeleitet von Paul R. Mendes-Flohr, (Jüdischer Verlag, 1993) (=マルティン・ブーバー(著)、ポール・R・メンデス＝フロール(編)、合田正人(訳)『ひとつの土地にふたつの民 ユダヤ-アラブ問題よせて』(みすず書房、2006年))。ブーバーとアーレントのバイナショナルリズムを比較したものとしては、早尾貴紀『ユダヤとイスラエルのあいだー民族／国民のアポリア』(青土社、2008年)が詳しい。ブーバーとマグネスの思想を扱ったものとしては以下の小論がある。“The Appeal of the Incurable Idealist: Judah L. Magnes and the Mandarins of Jerusalem,” in *Divided Passions: Jewish Intellectuals and the Experience of Modernity*, by Paul Mendes-Flohr (Wayne State University Press, 1991), pp. 390-409.

⁷ M. Buber, J. L. Magnes and E. Simon (eds.), *Towards Union In Palestine: Essays on Zionism and Jewish-Arab Cooperation* (Ihud (Union) Association), 1947.

- ⁸ マグネスやソルドが自らの思想を書物として残さなかったという点が大きな要因であると考えられるが、マグネスらのバイナショナリズム案が少数派であったということも、マグネスたちの活動に注目し、掘り下げて考察する機会が少なかったことの原因として想定できるだろう。ハンナ・アーレントは同時代の目撃者として、マグネスのアラブ人問題への懸念およびアラブ同盟を含むバイナショナリズム案は、シオニズム運動の主流派であり、牽引力を保持していたユダヤ機関やシオニスト機構らの公式見解とは矛盾するものであったことを報告している。ソルドについても名前のみ一カ所言及しているが、具体的にソルドがどのような人物であったかについての言及はない。Hannah Arendt, *The Jewish Writings*, Jerome Kohn and Ron H. Feldman (eds.) (Schocken Books, 2007[1992]), pp. 332-333.
- ⁹ マグネスの個人史の研究本を出版した Daniel P. Kotzin も、マグネスの複合的な思想を断片的に残された資料から復元することは注意を伴う困難な作業であったと述べている。Daniel P. Kotzin, *Judah L. Magnes: An American Jewish Nonconformist* (Syracuse University Press, 2010).
- ¹⁰ 本稿では紙面の都合上、マグネスとソルドのシオニズム理念とアハッド・ハアムのテクストとの具体的な比較、検討までを扱うことができない。これらに関しては今後の課題とする。
- ¹¹ マグネスの経歴に関する概略は、以下のものを参照した。Kotzin, *Judah L. Magnes*; Arthur A. Goren, *Dissenter In Zion: From the Writings of Judah L. Magnes* (Harvard University Press(1982); William M. Brinner and Moses Rischin, *Like All the Nations?: The Life and Legacy of Judah L. Magnes* (State University of New York Press, 1987); 高坂誠「ジュダー・マグネスとアメリカ民主主義—パレスチナ：和平と共存のイニシアチブ（I）—」『人文論集』第38巻第1号（2002年）、21-37頁；高坂誠「揺れる平和主義—ナチズムの台頭とジュダー・マグネス—」『同志社商学』第54巻第1・2・3号（2002年）、34-52頁。マグネスという一個人を扱った研究としては、上記の Arthur A. Goren の研究書が定評を得ている。なお同書には140に及ぶマグネスの書簡が収録されている。また、現時点で最新のマグネス個人史研究としては、Daniel P. Kotzin が自身の博士学位請求論文に基づいた前述の著作があげられる。
- ¹² マグネスの母方の祖母はドイツ文化からの影響を強く受け、ドイツ語を話すなど積極的にドイツ文化を受容していた。マグネスの母ソフィー・アブラハムソン（Sophie Abrahamson）もその影響を引き継いでいた。しかしハスカラーの家系一色であったというわけではなく、マグネスの母ソフィー・アブラハムソンの祖父（マグネスの曾祖父）は正統派に属しており、マグネスの母親も、結婚後も食物規定の戒律は守っていた。Goren, *Dissenter In Zion*, p. 5; Kotzin, p. 12.
- ¹³ Goren, *Dissenter In Zion*, pp. 101-106; 高坂「ジュダー・マグネスとアメリカ民主主義」、35頁。
- ¹⁴ Norman Bentwich, *Judah L. Magnes* (East & West Library, 1954), pp. 44-48; 高坂「ジュダー・マグネスとアメリカ民主主義」、30-33頁。
- ¹⁵ マグネスはまた、自衛は基本的な人権の一つとして捉えており、この点で、自分の身

は自分で守るというアメリカの信条を支持していた。そのため、彼は 1903 年 4 月、キシニョフで生じたポグロムに対し、ロシアのユダヤ人が自衛することを支持し、自らはアメリカにいながら武器を購入する資金を援助するためのユダヤ人の自衛協会 (Jewish Defense Association) の設立にも関わった。Kotzin, pp. 100, 362, n. 30; Goren, *Dissenter In Zion*, p. 14.

- ¹⁶ ソルドの生涯に関する概略は、以下を参照。Joan Dash, *Summoned to Jerusalem: The Life of Henrietta Szold* (Wipf and Stock Publishers, 2003 [1979]); Marvin Lowenthal, *Henrietta Szold: Life and Letters* (Greenwood Press, 1975 [1942]); Allon Gal (ed.), *Envisioning Israel: The Changing Ideals and Images of North American Jews* (The Magnes Press, 1996); Mira Katzburg-Yungman, *Hadassah: American Women Zionists and the Rebirth of Israel* (The Littman Library of Jewish Civilization, 2012); Reinhartz, Shulamit and Raider, Mark A. (eds). *American Jewish Women and the Zionist Enterprise* (Brandies University Press, 2005); Alexandra Levin (ed.), *Henrietta Szold and Youth Aliyah: Family Letters, 1934-1944* (Herzl Press, 1986); 大岩根安里「ヘンリエッタ・ソルドのシオニズム観におけるヘブライ語の意義」『一神教世界 2』(同志社大学一神教学際研究センター、2011 年)、60-72 頁。Marvin Lowenthal によるソルドの伝記と Alexandra Levin が編集したソルドの書簡集に関しては、詳細な脚注の情報がないことが難点であることを指摘しておく。しかし、この二冊の書物は、ソルドの個人史を扱った研究書のなかで必ずといって良いほど参照されている。
- ¹⁷ 当時の文脈でいうと、父ベンジャミンは正統派の流れに基づきながらも、礼拝時におけるオルガン演奏の導入や家族席を設けるなど礼拝の改革を行なった。ところが、後に会衆から改革が中途半端であるという反発を受けることになる。彼はユダヤ教の立ち位置の点では、現代で考えるならば、ユダヤ教保守派の先駆けとも捉えられる人物であった。そのため、父ベンジャミンはソルドが女性であったにもかかわらず、トーラーやタルムード講読の訓練の機会を与えた。
- ¹⁸ ボルティモアのシオニスト協会が活動を始めた年代は、1893 年説と 1894 年説の二つある。ソルドは、1894 年としている。Henrietta Szold, “Early Zionist Days in Baltimore,” in *The Maccabaeans* (June-July, 1917), p. 265.
- ¹⁹ Kotzin, pp. 198-200, 245-247.
- ²⁰ Letter from Magnes to Arthur Rupp (Jerusalem, April 18, 1936), in Goren, pp. 312-315.
- ²¹ Ratzabi, pp. ix, 424-432.
- ²² J. L. Magnes, *The Jewish Community of New York City* (Library of Congress, 1909), pp. 11-13.
- ²³ Naomi W. Cohen, *The Americanization of Zionism, 1897-1948* (Brandeis University Press, 2003), pp. 58-59.
- ²⁴ Hans Kohn (ed. and Introduced), *Nationalism and the Jewish Ethic: Basic Writings of Ahad Ha'am* (Herzl Press, 1962), p. 78.
- ²⁵ Two Letters to Gandhi from Martin Buber and J. L. Magnes, *The Bond; Pamphlets of the Group “The Bond,”* Jerusalem, No. 1 (Rubin Mass, 1939), pp. 33. このパンフレットには、マハトマ・ガンディーが『ハリジャン』紙 (Harijan : 神の子) においてナチスに対するユダヤ人の抵抗を論じた論考と、それに対するマグネスの反論が収録されている。

- また、マグネスの引用箇所に関する訳出は執筆者によるものであるが、適宜、高坂誠「揺れる平和主義」を参照した。高坂「揺れる平和主義」、45頁。
- ²⁶ ソルドの引用箇所に関する詳細および発言の背景に関する説明は以下で取り扱った。拙論「ヘンリエッタ・ソルドのシオニズム観におけるヘブライ語の意義」、62-64頁。
- ²⁷ Cohen, pp. 101-102.
- ²⁸ Kohn (ed.), *Nationalism and the Jewish Ethic*, p. 300.
- ²⁹ この場合の「道徳的な主張」とは、マグネスの考えるユダヤ教の理念に基づいた行ないのことを指す。
- ³⁰ Paul Mendes-Flohr, *Divided Passions and Experience of Modernity* (Wayne State University Press, 1991), p. 403.
- ³¹ 本稿では、訳出において“morality”および“morally”を「道徳性」と訳している。
- ³² M. Buber, J. L. Magnes and E. Siomon (eds.) *Towards Union Palestine: Essays on Zionism and Jewish-Arab Cooperation* (Greenwood Press, 1947). 頁番号は不記載。引用した言葉はソルドが1942年に述べたもの。この冊子はソルドの思い出を偲んで献呈されたものである。
- ³³ Kotzin, p. 222.
- ³⁴ アメリカ・ユダヤ人社会全体で、シオニズム運動が支持を得るようになった詳しい背景は以下を参照。池田有日子「1943年アメリカ・ユダヤ人会議をめぐる政治過程」『法政研究』第78巻第3号（九州大学法政学会、平成23年）、799-837頁。
- ³⁵ 小阪裕城「『ユダヤ人問題』の解を求めて—アメリカ・ユダヤ人委員会、国際人権とイスラエルの建国1942～1948年」『国際政治』、日本国際政治学会（編）、第176号「国際政治研究の先端11」（2014年3月）、45-48頁。
- ³⁶ Medoff, Rafael. *Zionism and the Arabs: An American Jewish Dilemma, 1898-1948* (Praeger, 1997), pp. 98-107; David H. Shpiro “Decision at Biltmore,” in *The Jerusalem Quarterly*, 41, (1987), pp. 112-122.
- ³⁷ ブーバー（著）、メンデス＝フロール（編）『ひとつの土地にふたつの民』、193頁。
- ³⁸ Henrietta Szold, “The Internal Jewish Question: National Dissolution or Continued Existence,” in *The Maccabean* 1, no. 2 (November, 1901), p. 57.
- ³⁹ Szold, pp. 58, 61.
- ⁴⁰ マグネスとソルドは、ユダヤ教を現実の側面に適応させる柔軟性をシェヒターから吸収し、パレスチナでの礼拝に取り入れた。
- ⁴¹ Martin Buber, Judah L. Magnes and Moses Smilansky, *Palestine, a Bi-national State* (Ihud [Union] Association of Palestine, 1946), pp. 7, 29; ブーバー（著）、メンデス＝フロール（編）『ひとつの土地にふたつの民』、133-134頁。
- ⁴² 「文化的シオニズム」を受容したシオニストも当然一枚岩ではなかった。例えば、上山安敏は、ブリット・シャロームの設立に尽力したショーレムを例に挙げて指摘している。「[ショーレムが] アーレントらに対してコスモポリタンの違和感を持ち、後のイフロード（統合）には参加しなかったのはそうしたアメリカのディアスポラとエルサレムのシオニズムの分極化が背景にあると考えられる」。上山安敏「〈シンポジウム講演〉エグザイル（Exile）の知識社会学」、『京都ユダヤ思想』第2号、（京都ユダヤ思想

学会、2012年)、101-102頁。